YAMATAI

邪馬台

文化総合誌　　2017年冬号（通巻205号）

北村芳太郎先生について

川嶌整形外科病院
理事長　川　嶌　眞　人

北村芳太郎先生は昭和16年3月、中津中学校卒業、昭和18年4月、平壌医学専門学校に入学しましたが第2次世界大戦の混乱の中、終戦後、何度もの死線を越える大変な苦労をしながら朝鮮から引き揚げて来られました。そして昭和22年、東京大学医学部付属医専の2年生に転入し同26年3月に卒業。昭和30年、横浜市立大学小児科に入局しましたが、昭和31年には長野県の佐久総合病院小児科医長になり、昭和32年の東京大学医学部病院物療内科入局を経て昭和41年1月、横浜市中区吉田町で医院を開業しました。また昭和42年には東京大学医学博士号を授与されました。医師としても大変な経歴を持つ方ですが、平成20年には中津に帰郷していました。そして平成27年5月、たまたまひょんな事から91歳で当院のリハビリ診療の問診を担当する事になりました。

大変お元気で素晴らしいキャリアをお持ちであることが分かり、我々は様々な事を学ぶ事が出来ました。

①医師というものは年老いても夢を持って前進する限りは仕事が続けられる事

②医師は戦争の最中であっても専門性を活かす事で生き延びていける仕事であった事

③また戦後の大変な混乱の中、死線を越えて引き揚げてきた事

が先生の手記から窺う事が出来ます。

また先生は平成27年7月から度々大分合同新聞の一面トップ記事『伝える戦争の記憶』で紙面を飾っている方でもあります。この度健康上の理由で退職されましたが、戦争を知らない我々の世代にとって戦争とは何か、人間とは何か、また医師はどうあるべきか、という事について色々と考えさせられる手記を寄せられましたので、ぜひ読んで頂きたいと思います。

（一部加筆編集　川嶌整形外科病院秘書課　竹下直光　高久保絹子）

ありがとうマスコットさん１

北村　芳太郎

私は93歳の老医です。パートながら現役の医師として、中津市にある世界でも有名な高圧酸素療法を行っている川嶌整形外科病院の一員として働いています。この病院へ縁あって勤務して2年ですが、そろそろ人間は引け際が大切と考え、身の廻りの整理を始めると共に、理事長先生に辞職を申し出たところ、理事長先生はまだまだ元気で頑張れるだけ勤務するように励まして下さいました。私が勤務している病院の理事長先生は、東京医科歯科大学と、大分

大学の臨床教授で、高圧酸素療法では世界的な学者で、年に数回は外国の学会へも出席されています。

私を高圧酸素療法の担当にして下さったお蔭で、昨年8月1日、脳梗塞に罹患し、脳神経内科へ入院した時、高圧酸素療法の文献の中に脳梗塞患者の治療として、早期にこの治療を行うと、かなり有効な結果が得られると書かれてあったのを思い出しました。そこで入院の翌日、主治医に「私の病院で高圧酸素療法をしたいから申し訳ありませんが退院をお願いします」と言って退院させてもらいました。早速、治療を開始しましたが、治療前の検査では、左前腕の軽度の麻痺と知覚障害、左腕の握力は5kg、右腕は20kgでした。治療と共に腕の麻痺も知覚障害も徐々に軽くなり、4日目には運動麻痺も知覚障害もほとんど治癒した感じで、握力計では、両腕共20kgでした。1クール30回ですが、都合で29回で治療を止めました。

約1年経っても異常は認められません。

病初に当り再度、私は理事長先生に退職を申し入れましたが、先生は毎日当院で治療するのだから辞める必要はなく、治療をしながら自分の席でリハビリ患者の相談相手をしていればよいと言われ、辞職は認めて戴けませんでした。そして約1年、やはり人間は引け際も大切と思い、身の廻りの整理を始めると共に、理事長先生に「歳ですから」と言って辞職を申し入れましたが、理事長先生は「まだまだ元気なうちは働いていた方がよい」と言われ、勤務を続けるようにと励まして下さいました。気を取り直して頑張れるだけ頑張ろうと決心をしました。

その翌日の朝、出勤準備中、突然息苦しくなり、いつも診て戴いている松永循環器病院へ緊急入院させて戴きました。早速、X線検査をして下さいましたが、そのX線写真を見て驚きました。なんと心臓が肥大して正常の1・5倍位になり、右胸部には肺の

半分位まで胸水が蓄積していました。その写真を見た途端、「ア、ア、1～2日の命だナ」と観念しました。その時、院長先生が「今は良薬があるから悲観しないで頑張って下さい」と励まして下さいました。酸素吸入をしながら病室へ運ばれ点滴も始まりました。間もなくして呼吸が次第に楽になり眠ってしまいました。眼がさめたらほとんど呼吸困難は感じなくなっていました。

その後、度々のX線検査で、心臓は徐々に小さくなり、胸水も少なくなって来ましたので、「これなら死なずに助かるかナ」と思うようになりました。

そして2週間後、酸素吸入も必要なくなり車歩行器で歩けるようにもなったので、生きる希望が持てるようになりました。6週間後、退院の許可を戴いたので、1ヶ月前から妻が認知症で入所している施設の『悠久の里』へ入所させて戴きました。妻静子の認知症は徐々にですが、進行していて現在、介護度4となっていました。入所して3日目にやっと落着いたので、車椅子で静子の部屋へ運んで貰いましたが、2ヶ月振りの対面でした。妻が今まで入所していた前のホームでは、私が妻に面会に行くと、私が帰った後2～3日は興奮状態となり「私も帰りたい」と言って、職員の方々を困らせていたようです。ある日、職員の方から「貴方が来られるのはよいが、帰られた後、数日、奥様が帰りたがって、皆困っています。出来る限り、来られる日を少なくして下さい」と言われ、しばらく行かないでいました。確か静子に会うのは2ヶ月振りかも知れません。久振りに介護度4の愛妻へ会いに車椅子に乗せられ、普段着のシャツのまゝ、伸び放題のボーボー髪で部屋に入ったものだから、しばらくじっと私の顔を見つめていましたが、やっと私だと分った様子なので「奥」と声をかけると手を差し延べて、「どうしてこゝへ」と質問の声を発しました。

私は病気の説明をし、そして危うく死にかけた事と病状を話し「やっと治ったので、こゝへ入所させて貰えた」と話しました。それから思い出話をしました。

大東亜戦争中、医学生の私が20歳、静子が18歳の少女だった時、友人の紹介で度々、佐藤家を訪ねましたが、残念な事にその友人は発疹チフスで病死しました。その後も3～4度、佐藤家を訪ねましたが、いつだったか静子さんがそっと「私が作ったマスコットお守りをあげます」と言ってくれました。その時は何とも思わず貰って帰りました。戦時中は恋愛感情など持つ余裕はなく、只々お国のために死ぬんだと自分を励ます毎日でした。教授連からは「世の中がどのように変るかも知れないから、困らないように出来る限り医学知識を頭につめ込んでおけ」と言われ、寸暇を惜しんで勉強しました。

残念ながら、教授の言われた通り、日本は昭和20年8月15日敗戦となりました。私は戦時中クラスでも指導的な立場にいたため知人の下宿屋のおばさんが「北村さん貴方はいろんな事をしていたので、いつ身の危険が起るかも知れないから、この拳銃を持っていなさい」と言って、小さな拳銃を渡してくれました。

敗戦間もない8月24日午前5時、アパートのドアを激しく叩く音で眼がさめ、ドアを開けるといきなり3人の朝鮮人が入って来て、私に銃を突きつけ、「早く服を着ろ」と怒鳴ったのです。「一寸待て!!トイレ」と言って拳銃をかくし持ってトイレへ入り、適当な場所にかくして洋服を着て出てくると、銃を突きつけられたまゝ廊下を歩かされ、トラックに向いました。間もなく友人の森田君と片村君の2人が連れて来られ、3人共トラックへ乗せられ赤衛隊という門をくぐって車は中へ入りました。我々は銃を突きつけられながら調査室へ連行されました。3人並べら

れて尋問され「学校の重要書類や器具を壊した事は、わが国家の財産に損害を与えた事になるので有罪だ」と言われました。そして私の尋問が始まろうとした時、調査室へ級友の新川君が入って来て、私を見ると「北村君どうした」と聞くので「何が何だか分らないが連れて来られた」と言うと、彼は朝鮮語で何か言ってくれました。すると調査官が「あゝそうか、君は帰ってよろしい。無罪だ」と言って直ぐに判決を下してくれました。後で調査官は東京の大学を卒業した人だと新川君は教えてくれました。

朝から何も食べてないので太った森田君が「北村、何か食べさせて貰えんかな」と言うので新川君へ「何か食べるものと飲むものをくれんかな」と言うと、彼はアンパン30ヶ位とサバリに水を一杯入れて持って来てくれました。森田君はあっと言う間にアンパン3ヶを食べ、サバリの水を飲むと「これで生き返った」と自分のお腹をさすっていました。片村君は何も言わずパンを食べていました。私は帰るとすぐ校長先生の所へ報告に行きました。校長先生は困った表情で「どうしようもないネ」と一言だけでした。夕方になって森田君、片村君2人も帰って来ました。「どうした」と言うと「先輩に助けられた。トラックが木炭車でなかなか出発しない所へ先輩の方が、俺達がかぶっている帽子を見て、『どうした』と言いながら調書を見て、『これは大変』とその場で調書を破いて、『いそいで帰れ』と言って帰してくれた」と言いました。

話によるとそのトラックは刑務所送りのトラックだと教えてくれたそうです。そして刑務所へ送られた総ての人は銃殺されたとの事で、危機一髪でした。しかし無事に2人共日本へ帰って来て医者になり、地域医療に貢献したそうです。敗戦国の国民程哀れなものはありません。横浜で開業医をしている時、姫路の患者さんが「私の弟は朝鮮へ死にに行ったよ

うなものです」と言っていました。

弟さんは京都大学卒業後、法務省に勤めていましたが、終戦の年の昭和20年4月、平壌の法院へ転勤になり「行ったまゝ帰って来ない」と、そのお姉さんは涙ながらに話してくれました。

終戦時、法院（日本の裁判所）や警察関係の仕事をしていた方は、ほとんど刑務所送りとなり、銃殺されたという話でした。友人の藤川君は仁川（じんせん）の警察署長をしていた父が気掛かりになり、まだ動いている汽車にとび乗って急いで、父のもとへ行きました。父はすでに危険だとの噂を聞いており、漁船を仕立てゝ日本へ帰る所でした。藤川君もそれに間に合ってそのまゝ一緒に九州熊本へ帰る事が出来ました。帰国してすぐに熊本大学へ入学したそうです。

私が日本へ引き揚げて帰った時、彼はすでに卒業して医者になっていました。

私は赤衛隊で無事、新川君に助けられましたが、その数日後、町を歩いていたら級友の金山君に出会いました。彼は「北村君、君を今、下級生達が戦犯1号と言って捜しているから、どこかへ早く逃げろ」と言いました。逃げろと言われても、汽車はもう動いていないし、考えた末、元軍人の佐藤豊吉さんが勤めていた兵器所関係の人達が、元師団のあった秋乙に居るのでそこに行こうと思いました。そこはロシア軍の監視下にあり、朝鮮人はそこには入れないと聞いたので、そこしかないと思い、佐藤豊吉さん（静子の父）の家へ逃げ込んでお世話になる事にしました。当時、若い男性や女性はロシア兵に見つかると連行されるという危い時期でもあったのです。福山四郎教授（引き揚げ後、熊本大学教授）に「日本へはいつ帰れるか分らないから、君の逃げ込んだ家の3人娘の誰かと結婚しろ」と言われました。そして教授と友人3人が日本酒を持って来て、教授が親代りとなり、仲人となって、ささやかな結婚式をやっ

て下さいました。花嫁は佐藤静子18歳、私は20歳で昭和20年12月22日、冬至の日でした。静子の母から「こん夜が一年で一番長い夜ですヨ」と言ってからかわれたのを思い出します。

秋乙へ行って初めて使役に出ました。30人位の人達がたむろしていたので「どんな仕事をするのですか」と尋ねると「定職を貰うと楽な仕事につけるが、あとはかなりの重労働です」と言われました。ロシア兵が来て「大工が欲しい」と言ったので、隣の人に「今、大工が欲しいと言ってますよ」と教えました。すると「私は少し出来ます」と言うので私が手を挙げるとロシア兵は「イジシュダー[※1]」と言って、その人を連れて行きました。そして「テーブルを2つ作れ」と言って別棟へ行って材料のある方を指さしていました。しかし連れて行かれた彼が「私は出来ません」と言うので、私が仕方なしに「何を作るのか」と聞くとロシア兵は「テーブルを2つ作れ」と言いました。仕方なしに私は見取り図を書くと「ハラショ[※2]」と言ったので明専で鍛えた腕で平面図、側面図を書くと「寸法を入れろ」と言われました。ロシア兵は私をどうやら本職の大工と思ったようでした。私は出来るだけ手のかゝらない材料を選んでテーブルを3つ作りました。見に来た兵隊は「ハラショ」と言って黒パンと肉塊をくれ、連れの男には「ニナーダ[※3]」と言っていました。

翌日から大工として毎日通いました。レーニンやスターリンの額縁造りや部屋の装飾を手伝わされました。戦車隊長が「お前は何故ドイツ語を話すのか」と言うので「俺はドクターなんだ」と言うとそれからは医務室からも時々呼びに来るようになりました。隊長とは時々ドイツ語でお茶を飲める付き合いが出来るようになり、隊長からは「将校の食堂へ行って昼食をとれ」と言われました。短い期間でしたが、間もなく引き揚げが始まり、私は平壌から鎮南浦[※4]へ

移住させられました。しかし悲しい事にコレラが流行して鎮南浦の埠頭の米穀倉庫で、ゴザ1枚の上で半年間、暮す事になりました。医者は居ないし薬も乏しく15歳以下の子供達が次々と麻疹に罹患し10人位が亡くなって行きました。重症の患者はロシア軍の病院へ連れて行きましたが一人も治って帰って来た人はいませんでした。医者は女医さんがほとんどでした。

埠頭では老婦人の大同江[※5]への投身自殺があったりして、いい思い出は一つもありません。鎮南浦で戦前から写真館を営んでいた実家へ敗戦と同時に帰宅していた西島喜輝君が埠頭へ私を尋ねて来てくれて、昼食にと朝鮮街へ平壌冷麺を食べに連れて行ってくれました。

初めて食べた冷麺のおいしかった事、毎日粗食で過していた私にとっては生涯忘れる事の出来ない美味でした。彼は帰国後、医師となり盛岡市で産婦人科を開業しましたが、盛業であったようです。歳をとってからは中国地方へ旅行したり、敦煌へ旅したりしていました。今、御子息が彼の跡を継いで地域医療へ貢献しています。

戦後1年間の抑留生活で、銃を突きつけられた事が4回ありましたが、一番怖かったのは、まだ結婚してない時、三姉妹と平壌の街へ用足しに行った帰り道、電車から降りたらロシア兵が沢山いたので、すぐ近くの山の中の道を通ったのですが、そこでロシア兵に出会ってしまいました。ロシア兵は妹の手を握り、私に銃口を向けてきたのですが、どうする事も出来ない状態で頭の中は真っ白になり、その瞬間、両親の顔が浮んで見えました。そうだ、ロシア兵は「GPU[ゲペウ※6]（日本の憲兵と同じ）が一番怖い」と親しくしていたロシア将校さんから聞いていたので、覚えたばかりのロシア語で「ヤ・ドームGPU[ゲペウ]イエスチ（私の家にGPUが居る）」と言うとロシア兵は

吃驚(びっくり)して妹の手を離し「カラー（朝鮮語で『帰れ』!!）」と怒鳴り返してきました。

4人は一目散に麓に向って後も見ずに走り降りました。麓に着いてホッとして振り返って見ましたが、ロシア兵の姿はもう見えませんでした。

2回目は引き揚げの途中、ある部落で休んでいると、朝鮮人が夕方来て「一寸来い」と言って私を連行して行きましたが、たいしたこともなくすぐ帰されました。帰ってみると、妹達が「今、姉が朝鮮人に連行されました」と言うので、私は暗い畦道を走って後を追いかけましたが、2〜300m程走った所で、姉に追い着きました。そして姉と朝鮮人の間に入って、「何で姉を連れて行く」と怒鳴ると、朝鮮人はいきなり拳銃を取り出し、私に銃口を向けました。「撃てるものなら撃ってみよ」と怒鳴ると、彼は撃つ事も出来ず拳銃を降ろし走り去って行きました。おそらく彼は私の気迫に撃てなかったのだと思いました。そして姉を無事連れ戻す事が出来ました。そんなわけで38度線[※7]に辿り着くまでには色んな事がありました。ある部落を通る時も、大人達は手を下さず、子供達をけしかけて我々に泥水をかけて来ました。また、道路で休憩していると、女達がやって来て勝手にリュックをあけ、自分達が欲しい物を勝手に持って行ったり、ある部落では通行料といって塩鯖一尾を無理に買わさせられたりしました。しかしそれとは逆に、いよいよ38度線を越えるという最後の部落では、学校に泊めてくれ、その上、出発準備をしている早朝には味噌汁も作って持って来てくれ、そして出発時には部落の人達が見送ってくれたのです。今迄ひどい仕打を受けて来たのですが、この部落の人々の我々に対する親切さに、それまで受けて来たひどい仕打も忘れる程でした。思うに戦前ここに住んでいた日本人が余程朝鮮の人達に親切だったのではないかと思いました。これまでの朝鮮に対する感

情もこの部落の人達の心温まる処遇に朝鮮を去るにあたって、良い印象を持って日本へ帰って来る事が出来ました。残念ながら、何という部落の名前だったか知らぬまゝでした。

いよいよ38度線という時でしたが、一寸、険しい山路を歩いている最中、義父が突然脳内出血を起して亡くなったのです。若者達が交替で義父を背負ってくれ、後少しで38度線という所の川の近くで休憩している時に土の柔い所を捜して男達が穴を掘ってくれ、そこへ埋葬する事が出来ました。義母は戦地で亡くなった人達の事を思えば、家族全員で埋葬してあげられたので「お父さんも幸せ者だったネ」と言っていました。その後、父の話をする者はなく日本へ帰って来て神奈川県伊勢原にある親戚の寺の墓地へ毛髪を埋葬する事が出来ました。

艱難辛苦（かんなんしんく）の引き揚げ道中でしたが、博多港へ上陸した時、リュックの中は食料も水もなく下着だけでした。

つづく

※1 「イジシュダー」＝「早く早く」（ロシア語）
※2 「ハラショ」＝「素晴らしい、良い」（ロシア語）
※3 「ニナーダ」＝「必要ない、いらない」（ロシア語）
※4 鎮南浦（チンナンポ）＝南浦（ナンポの旧称）
※5 大同江（ダイドウコウ）＝テドンガン）＝朝鮮半島北西部を流れる河川
※6 GPU（ゲペウ）＝ソ連代表部警視庁公安部の事でKGBの前身（国家政治特安部）
※7 38度線＝朝鮮半島をアメリカ軍とソ連軍が分割した占領ラインの事で北緯38度線上に定められ、現在の韓国と北朝鮮の国境となっている